ANNUAL REPORT 2025 - 2026

website　note　facebook　instagram

問い合わせはこちらから

info@arch-to-hoop-okinawa.com

一般社団法人 Arch to Hoop 沖縄
〒902-0066 沖縄県那覇市字大道172-36(NPO法人ちゅらゆい内)

代表理事　民秋 清史(株式会社モルテン 代表取締役社長)
理　　事　角田 直介(株式会社モルテン スポーツ事業本部 B+推進部 部長)
理　　事　金城 隆一(NPO法人沖縄青少年自立援助センターちゅらゆい 代表理事)
監　　事　岡田 優介(株式会社東京ダイム 代表取締役 兼 B.LEAGUE 理事)
事務局長　勝田 駿平(株式会社モルテン スポーツ事業本部 B+推進部 主査)
スタッフ　室伏 長子(NPO法人沖縄青少年自立援助センターちゅらゆい)
スタッフ　上原 岳文(NPO法人沖縄青少年自立援助センターちゅらゆい)
顧問税理士　有銘 寛之(有銘会計事務所)
デザイン　アシタネワークス
編集・原稿　アシタネワークス



ごあいさつ



一般社団法人 Arch to Hoop沖縄
代表理事 **民秋 清史**
Kiyofumi Tamiaki
（株式会社モルテン　代表取締役社長 最高経営責任者）

「Arch to Hoopは、大洋くんの物語なんだろうな」

イベントを終えた後の駐車場で、カメラマンを務めてくれている曽我部大洋くんと話していたとき、ふとそんな思いが頭をよぎりました。彼は変わりました。彼だけではありません。Arch to Hoopに関わる一人ひとりが、活動を通じて少しずつ変わってきています。

この活動を始めたときは、何から始めればよいか分からず、リディラバの安部さんにアドバイスをもらいに行きました。それから、ちゅらゆいの金城さんに出会い、岡田優介さん、麻生さん、國場組さん、ブエンカミーノさんへと、仲間の輪が広がっていきました。

この一年は、これまで育んできたつながりが、新たな体験や挑戦へと広がった一年でした。那覇の街なかで開催したイベントでは、若者たちが企画や運営にも参加し、それぞれの得意を生かして場をつくりました。麻生グループの皆さまにご協力いただいた「Arch to Work」では、仕事の現場や働く大人との出会いが、自分の将来を考えるきっかけになりました。また、コートレンタルの仕事を通じて若者が働く経験を積む仕組みが動き始め、広島でも活動が広がっています。

私たちが大切にしているのは、一度の体験で成果を求めるのではなく、子どもたちの歩みに長く寄り添うことです。「やってみたい」と思えることや、安心して関われる大人に出会うこと。その積み重ねが、いつか自分で未来を選ぶ力につながると信じています。そして、その場をともにつくる大人にとっても、多くの気づきや学びが生まれています。

Arch to Hoopは、企業とNPOが長期にわたって連携する、新たな仕組みを模索しています。ソーシャルセクターの活動は、効果を測ることが難しく、何を成果として捉えるべきかの議論を重ねてきました。いま、理事会で共有しているのは、「参加している一人ひとりの物語を大切にしよう」という思いです。若者だけでなく、大人たちにも、数字だけでは測れない、それぞれの物語がうまれています。

これからも、一人ひとりの物語を大切にしながら、Arch to Hoopがみんなの可能性を広げられる場になるよう、活動を続けてまいります。今後とも、温かいご支援とご参画を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

[Vision]

子どもたちがあきらめることなく、
自分の可能性を広げられる未来を

[Mission]

バスケットボールを通じて
非日常体験を提供し、
子どもと大人との架け橋となる

参画企業

molten Moving with Possibilities

Aso GROUP

KOKUBA-GUMI

参画団体

希望を感じられる世の中に ちゅらゆい

encourage

特定非営利活動法人 ブエンカミーノ

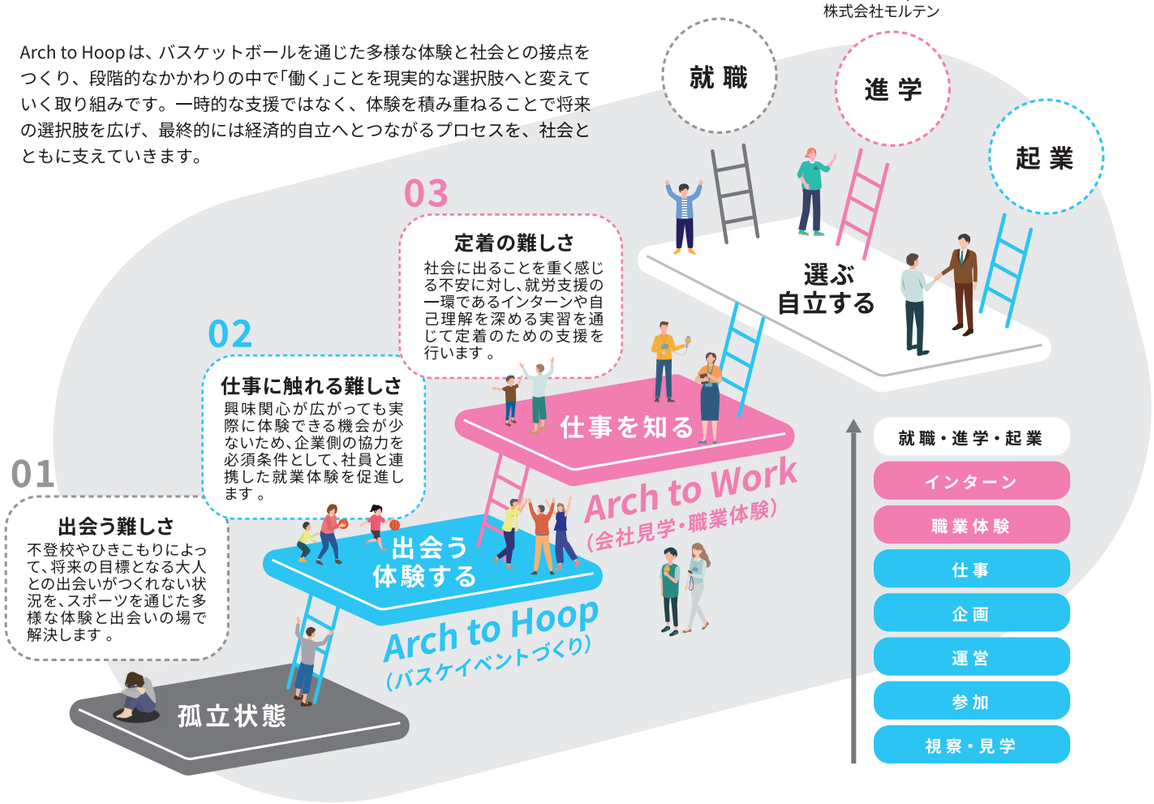
企業の参画が、子ども・若者の可能性を広げる

企業とNPOが連携することで、子ども・若者の体験機会や将来の選択肢はどう広がるのか。Arch to Hoopは、そんな問いに向き合いながら、少しずつ仲間が増えてきた取り組みです。そこで今回は、実際に参画いただいているお三方に話を伺いました。



ファシリテーター：勝田 駿平
Shunpei Katsuta
Arch to Hoop沖縄 事務局長
株式会社モルテン

Arch to Hoopは、バスケットボールを通じた多様な体験と社会との接点をつくり、段階的なかかわりの中で「働く」ことを現実的な選択肢へと変えていく取り組みです。一時的な支援ではなく、体験を積み重ねることで将来の選択肢を広げ、最終的には経済的自立へとつながるプロセスを、社会とともに支えていきます。



正解のない場に身を置くことが、突破口になる

勝田　企業としてこの取り組みにかかわることを決めた背景と、現場で感じたことを聞かせてください。

佐藤　寄付だけの関係であれば、お金を振り込んでレポートをもらって終わりという"イージーな関係"にもなり得ます。社員が実際に現場に関わることで、若い世代に新たな気づきや良い刺激になるんじゃないかと思いました。麻生の社員は内向きな傾向があって、外に発信していくことが苦手です。正解のない現場に身を置くことが、その突破口になると感じています。

小橋川　地元企業として地域に何ができるかを以前から考えていたというのが一つ。もう一つは社員育成の面でも可能性を感じました。新卒で入った社員はどうしても社内の価値観に固まりやすい。失敗が許される別の場所で動いてみることで、引き出しが増えていくと思っています。

佐藤　子どもたちとのかかわりの中では、想定通りにいかないことが多い。社内ではルールや手順があって仕事に正解を求めがちですが、現場では想定外の反応が返ってくる。「正解を出したい」「失敗したくない」という意識が強い若い世代にとって、それ自体がすごく大きな学びになりました。

金城　企業の方が現場に来ると「ちゃんとしなきゃ」と思われることが多いんですが、失敗しても大丈夫だと伝えたいんです。声のかけ方を間違えたり、距離の取り方で戸惑ったりしても、フォローするのが私たちNPOの役割です。怖がらずにまずかかわってほしい。その中でしか見えないことがあると思っています。



佐藤 由利子さん
Yuriko Sato
株式会社麻生 人事部 部長







課題を直接解決するというよりも、一緒に伴走する

金城　NPOの立場からすると、これだけ企業の皆さんがかかわってくださること自体がありがたい。ただこの活動は課題解決型ではないんです。答えはまだ見えていないけれど、子どもたちのために必要なことを一緒に考え続ける、"課題伴走型"の取り組みだと思っています。

地元企業が顔を出すことには意味がある

勝田　子ども・若者たちに起きている変化はどんなものがありますか。

金城　一番大きいのは「こういう大人もいるんだ」と知ることです。普段の生活では出会わない仕事をしている人に触れることで、将来を考える材料が増えていく。

佐藤　何かを教えるというより、「こんな働き方がある」「こんな大人がいる」と知ってもらうこと自体に意味があると感じています。社員にとっても、子どもたちと接する中で自分の仕事や生き方を見直すきっかけになっています。

小橋川　地域の子どもたちの選択肢を広げるという意味でも、地元企業が顔を出すことには意味がある。同時に、社員自身も「社会と会社はつながっている」と実感できる場になっています。



小橋川 和哉さん
Kazuya Kobashikawa
株式会社國場組 総務部 課長





金城 隆一さん
Takakazu Kinjo
NPO法人ちゅらゆい 代表理事
Arch to Hoop沖縄 理事



5〜10年後にあの時の経験があったからと思い出されるような、「種まき」だと思っています

勝田　最後に、今後への想いを聞かせてください。

金城　この取り組みを一過性のものにしないこと。子ども・若者の変化には時間がかかる。だからこそ、長く伴走してくれる企業が増えていくことが大切だと思っています。Arch to Hoopは、すぐに成果として見えるものではなくて、5〜10年後にあの時の経験があったからと思い出されるような、「種まき」だと思っています。

小橋川　一社でできることには限界がありますが、異なる立場の組織が一緒になることで、できることは確実に増えていく。この輪が広がっていけばいいなと思います。

佐藤　やってみて初めて分かることがたくさんありました。こうした実感を、他の企業にも共有していけたらいいですね。

麻生グループの仕事を知ろう！

「数年後、再会できたら本当にうれしいですね。」

2025年8月、麻生グループ様のご協力を得て、2回目となるArch to Workを福岡県で行いました。Arch to Hoopを通して出会った大人が、普段どのような仕事をしているのか。NPO法人ちゅらゆい、NPO法人エンカレッジ、一般社団法人URUFULLの子どもたち総勢19名が参加した様子を振り返ります。







ダイジェスト動画はこちら



子ども



まこっちゃん

身体への障害があり、普段は介護されることも多いまこっちゃん。
今回はそのような境遇から介護の現場を体験しました。

「普段は介護される側が多いので、今回実際に介護の仕事を体験してみて『いつもありがとう』という気持ちがより出てきました」「仕事の裏側を知れて、どんな気持ちで働いているか知れました」。





はーるー

救急救命室の現場を見学したはーるーさん。
実際にケガをした患者さんを目の当たりにして、病院が命を救える場所だと実感しました。

「今日はじめて会った人、いつも来る人などをみて、病院はたくさんの命を救える場所なんだと気づきました。」「将来の選択肢として、病院もいいなと思いました」。



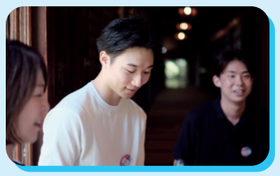
おとな



左 **末永 太一**さん
Taichi Suenaga
右 **五ノ谷 郁弥**さん
Fumiya Gonotani
株式会社 麻生
管理本部 人事部

Arch to Hoop の活動に、より一層意識を向けられるようになりました

数年に渡ってArch to Hoopに参画してきた五ノ谷さんですが、「どこか外から見ている自分がいた」と本音を漏らしてくれました。ただ、ご自身の職場をフィールドにグループ横断で企画したことで、徐々に「自分ごと」になりつつある実感も出てきました。「今後はインターンの受け入れまでできると面白いかも」と、未来の展望まで語っていただきました。
また、末永さんは「麻生の仕事が、中高生たちに刺さるだろうか？」と準備段階では不安があったようですが、「今回参加して『福岡で働きたい』『麻生グループで働いてみたい』と思ってくれた子と、数年後、再開できたら本当にうれしいですね」と、大きなイベントをまとめた安堵感と人事部らしい本音を語っていただきました。





国際通りのすぐそばで！

「スポーツは苦手です。バスケのイベントだけなら参加しなかった。」

2025年11月、パレットくもじ前交通広場 ――モノレールの高架下を人が絶えず行き交う“那覇のど真ん中”にバスケットコートを設置しイベントを開催しました。事前の企画から運営まで参加した若者たちの声とともに、イベントの様子を振り返ります。





【開催前の舞台裏】
当日のプログラムを考える企画チームやノベルティ缶バッジを手がけた若者など、イベントを裏側から支えた子ども・若者の奮闘を取材しました。





アスミ

「来年は、もう少しだけ積極的に参加したいです。“少しだけ”ですけど」今回、初めて企画から参加したアスミさん。普段は人前で発言をしたり注目を浴びることが苦手。でも、会議中の発言にみんなから「いいね」と言われたことが自信になりました。次のイベントで” 少しだけ”積極的になったアスミさんに期待しています。





トワ

「初心者でも楽しめるように、もっと良くできたはず」そう切り出したトワさん。「バスケ初心者でも楽しめるようなイベントにしたい」、そう思って臨んだ当日でしたが納得できる運営ができなかったそうです。
来年からは高校生。忙しくなるとArch to Hoopには参加できないかもしれないけれど「もしまた機会があれば・・・」と次回への抱負を語ってくれました。





マイケル

「低い声やトーンだけど、やり方次第では武器になるかも」福岡でのArch to Workを含めて3回目の参加となるマイケルさん。今回はMCに挑戦しました。もともと、声質やトーンなど自身の声に対してコンプレックスを抱いていましたが、MCの経験を経て心境にも変化があったそう。「この声を活かしたMCのやり方があるかもしれない。YouTubeを見て喋りの研究をしてみます」。次回のイベントでは、マイケルのMCにもご期待ください。





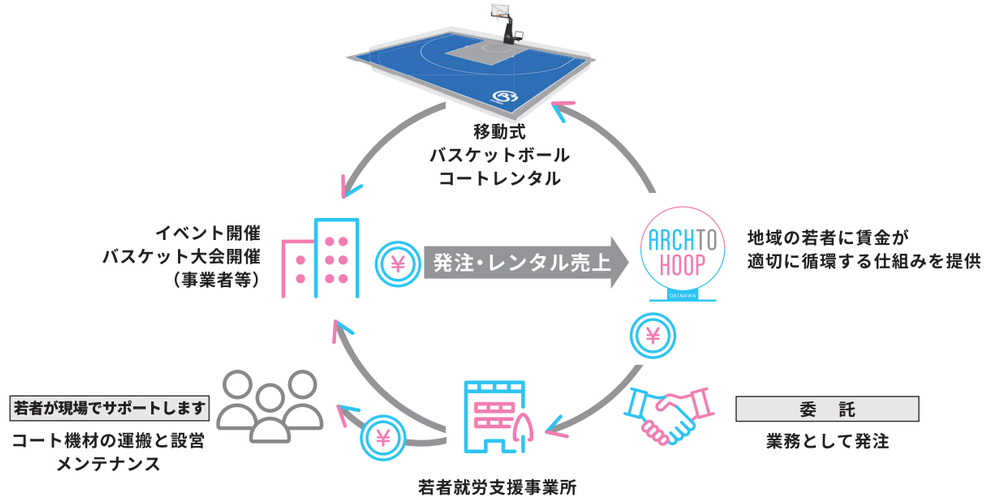
リュウト

「ゴールができあがっていくのを手伝うと、なんか気持ちよかったです」今回のイベントでは「仕事」として参加したリュウトさん。朝5時から夜9時まで、スタッフと同じスケジュールで参加しました。「スポーツは苦手です。バスケットのイベントなら参加しなかった」。競技以外にも参加の方法がある、リュウトさんの言葉からArch to Hoopの様々な関わり方を垣間見ました。

コートレンタル本格始動

働く実感が、若者の未来を開く

バスケットボールのイベントや大会を開きたい。でも、コートの調達・設営・撤収までを自前で賄うのは難しい——そんな主催者の課題に応えるのが「バスケットコートレンタルサービス」です。移動式バスケットコートを、お祭りの中に、商業施設に、街のど真ん中に。コートの搬入・設営・運営・撤収まで、若者就労支援事業所「アシタネワークス」に通う若者たちが担います。レンタル収益は人件費として若者に還元され、次の体験機会へとつながっていく。体験と収益が循環する仕組みづくりが始まりました。







コートレンタルの業務は、搬入・設営・撤収といった力仕事から、営業活動、映像・写真撮影まで多岐にわたります。曽我部大洋さんはその全てに挑戦してきた一人です。「営業は説明のときに噛んじゃったりして、自分には難しすぎました」苦手な仕事があっていい、とここでは言います。代わりに見つかったのが、撮影の仕事でした。

「カメラがないときはまともに人を見られませんが、カメラを通してだと見ることができる。カメラマンという役割があると、人とも話せます」搬入・設営を終えたコートで、参加者が思い切りバスケを楽しむ。その瞬間を自分のカメラで切り取る。働いた先に、喜ぶ人の顔がある。「やらずに後悔するより、やって後悔したほうがいい。家にひきこもっていたら体験できることじゃない。Arch to Hoop に出会えてよかったと思います」

——曽我部大洋（アシタネワークス利用）

2025年度のレンタル実績

実績時期	内　容	開催場所
2025年12月	3×3 YAESE CUP	やえせのシーちゃん広場（八重瀬町）
2026年3月	King of The Court Japan 3×3大会	宇堅ビーチ（うるま市）
2026年5月	みんなでPLAY！あしびなーGO！GO！	沖縄アウトレットモールあしびなー（豊見城市）

野球場・ビーチ・アウトレットモール・陸上競技場など、屋外・屋内を問わず様々なロケーションでの設置実績があります。
設置可否についてはお気軽にお問い合わせください。







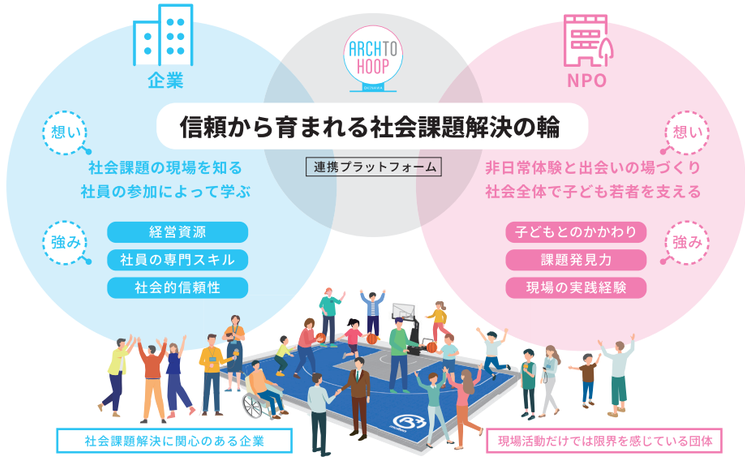
コートレンタルに関する
お問い合わせは こちらから

info@arch-to-hoop-okinawa.com

HPへ

未来の構想

ひとつの出会いが次の出会いを呼び、仲間の輪は沖縄から広島へと広がってきました。その土台にあるのは、企業とNPOが短期的な成果を過度に求めず、互いの現場をリスペクトしながら時間をかけて育んできた信頼です。信頼でつながる関係だからこそ、「支援する・される」を超えて、子ども・若者の将来の選択の幅を着実に広げていくことができます。



「なかなか稀有な試みだなと。もっと増えていくといいなと、すごく思っています」



安部 敏樹 さん
Toshiki Abe
Ridilover代表取締役
一般社団法人リディラバ代表理事

「あべラジオ」に民秋と勝田が出演
企業×NPOの長期連携がなぜ上手くいっているのかを語りました

子どもが健やかに成長するために必要な体験機会が、社会構造の変化により減少しています。
大人が地域にかかわらなくなり、社会全体で子どもを育むインフラが機能不全に陥った結果、かつて当たり前にあった多様な大人との出会いや、多様な仕事を知る機会は少なくなっています。さらに、体験機会が家庭の余力にのみ委ねられるようになり、保護者の経済的・時間的状況が子どもの体験に直結する構造へと変化してしまいました。
AIが急速に進化するこれからの時代、体験を通じた成長の重要性はかつてより格段に高まっています。自分で考え、試し、選ぶといった力は、体験の積み重ねによって育つ。その機会が得づらい子どもたちが増えていることは社会全体の損失につながります。
こうした問題に、Arch to Hoop は企業と NPOが連携して向き合っています。地域のどこにでもあった安価な体験が「民間サービス」へと置き換わり、対価を払える家庭とそうでない家庭で機会に差が生じる中で、困難を抱える家庭の子どもに体験機会を届ける NPO は重要な存在です。ただ、NPOのリソースには限りがある。だから企業の力が必要です。ラジオの収録で印象的だったのは、NPOの現場をリスペクトしながら、答えの見えない問いに長期で向き合う覚悟を、企業側がちゃんと持っているということでした。
短期間で見える成果を求めず、5年後・10年後に種が芽吹くことを信じて、相互補完的に活動をブーストする。とっても素晴らしいスタンスだなと思います。こうした連携の形は日本ではまだ少ないので、これからもっと増えていくといいなと思っています。

参画の方法

Arch to Hoopへの参加はどんなかたちでも構いません。皆さんができること、できるかたちで。皆さんの参画を心からお待ちしています！

1. イベントに参加する — 子どもと大人がバスケットボールでつながる非日常体験を一緒につくりませんか
2. コンテンツで参画する — バスケコート内外でのコンテンツ（物販、飲食、音楽、エイサーなど）を提供いただけませんか
3. モノで参画する — スポーツ用具やイベント活用備品などを寄贈いただけませんか
4. 寄付で参画する — 活動を継続できるように金銭面でサポートいただけませんか
5. 仕事体験で参画する — 子どもたちの将来の選択肢を広げるための仕事体験を提供いただけませんか

活動計算書

麻生グループ：5,000,000
國場組：800,000
沖縄県スポーツ振興課：5,809,000
モルテン：1,486,685

2025 年 4 月 1 日から 2026 年 3 月 31 日まで
単位：円

科　目	沖　縄	広　島	合　計
収入の部			
コートレンタル事業収入	468,000	0	468,000
寄付金収入	5,800,000	1,486,685	7,286,685
助成金収入	5,809,000	0	5,809,000
収入合計	**12,077,000**	**1,486,685**	**13,563,685**
収出の部			
事業費	14,244,220	1,468,810	15,713,030
管理費	924,159	0	924,159
支出合計	**15,168,379**	**1,468,810**	**16,637,189**
当期経常増減額	**△3,091,379**	**17,875**	**△3,073,504**
経常外収支（純額）	△1,342,714	245	△1,342,469
当期一般正味財産増減額	**△4,504,093**	**18,120**	**△4,485,973**
正味財産期首残高	11,758,141	8,977	11,767,118
正味財産期末残高	**7,254,048**	**27,097**	**7,281,145**

決算報告書はWebサイト「法人概要」で公開しています。

メディア掲載

Arch to Hoopの活動を、下記のメディアに取り上げていただきました。

テレビ

2026年 2月28日	広島ニュースTSS	バスケで交流！不登校など悩みを抱える子どもたちの可能性を広げたい モルテンでイベント 28日
2026年 2月28日	広島ホームテレビ	バスケで相互理解を スポーツイベント開催【広島市】

新聞

2026年 6月122日	中国新聞	広島市西区のモルテン、子どもに多様な体験提供　NPO法人と連携
2025年7月16日	日本経済新聞	「スポーツ体験格差なくせ」モルテン、子どもと社会つなぐ場 沖縄でバスケイベント広島でも事業立ち上げ
2025年 11月13日	琉球新報	バスケで体験格差解消へ
2025年 12月1日	沖縄タイムス	バスケ大会 子が企画 那覇 社会勉強「仲も深まった」
2026年 1月27日	琉球新報	バスケ体験、自立への道筋
2026年 2月9日	沖縄タイムス	バスケ通し若者の就労支援 一般社団法人「Arch to Hoop」、県内でコートのレンタル事業 設営や撤去を担い収入に

その他

2026年 1月21日	リディラバジャーナル	未来へのシカケ／Case3. 沖縄の若者の就労問題に取り組む「Arch to Hoop沖縄」（前編）（後編）
2026年 1月21日	FLY Magazine	コートは、未来への入口だ。Arch to Hoop OKINAWAが示す“体験から雇用へ”の挑戦
2026年 2月10日	あべラジオ／リディラバ	あべラジオ特別編 vol.143

広島でも活動がスタートしました

沖縄で3年間積み上げてきた連携の形が、広島でも動き出しました。学校以外での体験や学びの場をどう広げられるか── 2025 年6月・2026 年2月、モルテンとブエンカミーノが一緒につくった現場の様子を少しだけご紹介します。





株式会社モルテン
管理本部　経理部

渡辺 成美
Watanabe Shigeyoshi

これまで2回のイベントを経て、広島でもArch to Hoopを推進していけるという確信を得ました。社内の施設やブランド、人材など、広島ならではのリソースが活きることを実感しています。
2回目のイベントでは経験を重ねた分、想定できることが増えて、当日も柔軟に動けるようになりました。次回は各事業部から企画メンバーも加わり、モルテンの事業部横断のプロジェクトとして広がっていきます。
この活動は、社会課題に関心はあるけれど関わり方が分からない社員が、地域の課題や他社の価値観という普段の仕事では出会えないものに触れる機会になっています。自分に合った形で参加できる間口の広さも、この活動の魅力だと感じています。新たな視点や考え方を得て、社員一人ひとりが少しずつ変わっていく。その積み重ねに、この活動に関わる意味があると思っています。



NPO法人ブエンカミーノ
安佐北フリースクールOKAZAキッズ
事業統括責任者

金　志明
Kim Jimyung

毎回Arch to Hoopでは、子どもたちの普段見られない表情や、ひたむきにボールを追いかける姿に感動させられます。この一年間でフリースクールの子どもたちが集団でスポーツ遊びを自主的にするようになったのが一番嬉しい変化です。
中でも、長年不登校だった男の子がバスケをきっかけに「もっとスポーツをやりたい」と言い出し、今年度から中学校へ通い始めました。
企業とNPOが本気で手を組み、不登校の子どもたちのために非日常の体験をつくり上げる。こうした取り組みは、全国的にもまだ珍しいと感じています。参加した大人たちが子どもたちに真剣に向き合い、全力で楽しませようとする姿そのものが、社会に居づらさを感じている子どもたちを勇気づけています。この熱量で、広島の不登校シーンを明るくしていきたいです！！